平和教育関西国際フォーラム記録

概容

「新しい戦争」や地球環境の問題、地球規模での経済の進行や格差の拡大など、21 世紀の様々な暴力の現状に伴い、日本国内では平和教育の再生が急務とされている。被爆体験・戦争体験の継承や日本国憲法の平和主義の意義の深化を中心とする伝統的な平和教育の資産を継承しながらも、世界的な平和教育の流れとも折り合う、新たな時代の変化に対応可能な「平和を形成する力」の育成を可能にする平和教育のあり方とは、どのようなものだろうか。また、本年３月に発生した東日本大震災による被害からの社会の再生についての課題も、教育界に投げかけられている。

「平和教育関西国際フォーラム」は、そのような平和教育の混迷期を脱するための、理論や実践の様々な取り組みを互いに紹介・検討しあう試みのひとつである。平和教育地球キャンペーン（GCPEJ）の主催による本会合の記録は、来年度に日本国内にて世界大会の開催予定である国際平和教育研究集会（IIPE）への連携を念頭に置きながら、これ以降の平和教育（とくに関西地域での）の発展に資するためのものである。

発表･報告は有志によるもので､紹介された取り組みはいずれも大変な準備や労力を背景とする意欲的なものであり、報告後の検討の時間は自然と参加者による自由討論へと発展し、ちょうど座談会のような雰囲気の研究会となった。

5 月 14 日（土）

報告Ⅰ.「ガンディーと原子爆弾」酒井 知美（大阪女学院大学）

⑴ 報告の要旨

本報告は、暴力と非暴力の概念定義を行った上で、ガンディーのいくつかの発言から彼の原爆観を推察し、またナチスドイツの暴力についてのアインシュタインやネルーらとの間に交換された書簡などから、反核の思想と非暴力運動との結びつきについての考察である。とくにガンディー思想の影響を強く受けていたネルーが、アインシュタインにハンストを迫ったこと、またヒロシマを訪問ことなどの背景を詳しく分析しようとするものである。

⑵ 検討項目

研究のフレームワーク
非暴力運動での指導者と市民の関係
原水禁運動との関わり
インドの核開発
被爆者による平和運動
ハンスト（自分を傷つける、身を捧げる、ことの意味と是非）
レジスタンス
南アフリカの反アパルトヘイト運動
アメリカの核開発
国際政治と思想の関係を押さえる必要性

⑶ コメント

報告者は、日本の被爆者の運動とガンディーの非暴力の運動とのつながりは実際にはあまりないのではないか、との見解であったが、それに対して世界的な平和運動・非暴力運動の事例からの指摘、意見の交換がなされた。ディスカッションの中で、ヒロシマの精神の寛容性や、「ヒロシマの精神はひとつではない」という言葉の重みについての指摘（長谷、アレキサンダー）が印象に残る。報告者は、ガンディー思想と近年のインド政府による核開発との矛盾についての分析を今後の課題としているが、さらに大きな展開が望まれる。

報告Ⅱ.「ポーポキ、平和って、なに色？ じゃ、戦争は？」ロニー・アレキサンダー（神戸大学）

⑴ 報告の要旨

「ポーポキ」運動では、平和教育のあり方として、「考える」→「動く、笑う、楽しく学習する」ことで、実際スキルを身に着けることを目指している。五感を用い、感性をもとにした方法を教育に取り入れる試みである。ポーポキというキャラクターが語るアニメは『平和ミュージアム―岩波 DVD ブック』（岩波書店）に所収されているが、同館の安斎名誉館長との関わりのなかから、「ちがった考え方のできる語り方」の必要が痛感されたとのことである。色やにおいの感じ方を共有するなどの方法は、従来型の「証言」の聞き取りの活動とは異なり、対話をもたらし、「平和」がさまざまな人びとによって支えられているということに気づかされる。「ポーポキ」は東日本大震災の被災地にも訪れ、フクシマの子どもたちは、大きな布に様々な絵を描いた。それらは子どもの様々な物語を反映し、平和へのミューラル（壁画）となっている。

⑵ 検討項目

「ポーポキ」の広がりとインパクト
ユダヤ人のトラウマの恐怖と表現することで癒されること
表現アートセラピー
戦争体験を五感で感じること
教育方法として
トラウマを表現することへの批判的な捉え方
トラウマの表現後のフォローについて
コミュニティー・アート（アーチストでない人によるアート）

⑶ コメント

「ポーポキ」が、日本の文化と平和運動のかかわりについて、いかに深い洞察のもとで企画されていたか、改めて感じさせられる報告である。参加者一同、「ポーポキ」の誕生秘話について、深く触れる幸運に恵まれたことになった。報告者は、この会合でもそうであったが、日本社会の文化や習慣を深く洞察し、人々に受け入れられる話し方を配慮しながら発言をしている。ポーポキが日本の子どもたちのなかにストレートに入っていき、心の深いところにある様々な思いを自然に引き出す秘密について、多くに気づかされることとなった。

報告Ⅲ.「世界の子どもたちとの協同学習・共同制作を通して異文化理解」塩飽（しあく） 隆子（ジャパン・アート・マイル）

⑴ 報告の要旨

ジャパン・アート・マイルは、インターネットを通じて出会った世界の子どもたちが、テーマのある大きな壁画を半分ずつ描いて共同制作することにより、世界を身近に感じながら、自立した子どもを育むことを目指す活動を行っている。インターネットを活用し、メールやテレビ会議などを活用することにより、教室どうしを結びつける交流をサポートする取り組みである。これまでに世界の 30 ヶ国、7 万人が参加している。また、子どもたちの作品を展示する活動も行っている。絵画制作を通じて、多文化理解から平和学習へと展開が進み、「自分をもっと知ってほしい」「相手をもっと知りたい」気持ちが世界の平和につながっていくと考えている。

⑵ 検討項目

キッズ・ゲルニカ
団体の選択について
平和博物館とのつながり
法人化
助成を受けることによる圧力への懸念

⑶ コメント

従来型の平和学習とは異なる新しい形（淺川）として、大いに注目を浴びる活動である。現場の教員が、国際交流がしたくても相手探しができなかったことや、翻訳の問題、トラブルが起こった場合への懸念、などから二の足を踏んでいた時代から、歩みを前に進める取り組みである。「打ち上げ花火」「交流のための交流」「伝えるだけで相手理解に至らない」「学習効果がはっきりしない」など従来の国際交流でよくある失敗に対して、慎重な検討のもとに運営がなされており、実績をあげている活動として、今後ともますます目が離せない取り組みである。

報告Ⅳ.「「平和教育学」の新たな用語と意味（概念）の考察」金 惠玉（Kim Hye-ok、立命館大学、大阪産業大学,、奈良県立医科大学 非常勤講師）

(1) 報告の要旨

博士論文をもとに、近年の「平和教育学」の成立要件に関する諸論を整理しながら、解りやすく構成された貴重な報告である。米国、欧州、韓国、日本での平和教育に関する諸説（不要論から教育全体が平和教育であるという全体論・不可分論まで様々）を比較分析しつつ、報告者は「平和教育学は、平和教育についての理論と実践を体系的に研究する学問であり、平和学および教育学との密接な関係を保ちつつ、固有の平和教育的観点で研究する独立した学問である」との立論を試みている。また、平和教育学は、実践試行的、学際的、統合教科的、比較教育学的研究の重視、規範的・批判的、であるという性格を持つものとする。

(2) 検討項目

「国際教育」との関係
ジェンダー平和論との関係
概念やフレームワークの整理について
「平和教育学」の固有性
「平和教育学」で扱われる価値の定義はあるが実践で曖昧性が出ることについて
日本平和学会の平和教育へのスタンス
サイエンスとしてのレジティマシーの自己証明
アカデミックを目指しているがアカデミズムそのものでない
問題意識と効果を社会科学的にまとめていく
「３年やったらどうなったかみせてほしい」という問いに対して、効果や条件を明らかにしていく必要性

(3) コメント

国内の平和教育の混迷の根幹にある問題のひとつは、「平和教育学」が固有の学問としての立地条件を満たしているという存在証明が、なかなか共有・確保されないことにあった。報告者は長い間、世界各地の平和教育を実際に視察し、現地において関係者たちと対話しながら、この問題に正面から取り組んでいる。「価値」「方法」「実践」のそれぞれにおいて、平和教育には従来からその固有性に対する批判が発せられてきたが、それらの批判には常に真摯・鋭敏かつ自覚的に向き合いつつも、さすがにこのような議論についてはそろそろひとつのランドマークを置かねばならないであろう。本報告は、その作業に大きく資するものであると思われる。

５月１５日（日）

報告Ⅴ.「イスラエル・パレスチナ紛争下における民族の共生と相互理解教育—ユダヤ・アラブの共生村「平和のオアシス」の実践から」吉村 季利子（大阪大学大学院）

(1) 報告の要旨

イスラエル・パレスチナ紛争地において、ユダヤ・アラブの共生村「平和のオアシス」の実践が試みられており、この報告はこの取り組みの意義の紹介を主とするものである。同村は、1972 年にブルーノ・フッサール神父が、両民族が完全な平等のもとに生活していたとされる昔のエルサレムのコンセプトをもとに、同じ人数に調整されたユダヤ人・ア

ラブ人の住民が住む村で、２つの民族・３つの宗教の、共存・平等を根幹に、非暴力による平和的な共生の道が模索されている。そこでは、エンカウンターの手法や仏教（ティク・ナット・ハンとのつながり）の瞑想の手法なども取り入れたホリスティック教育により、相互理解、共感性、癒し、共生、などの理念の実現が目指されている。

⑵ 検討項目

ホリスティック教育
分断壁に描かれた絵画について
国際平和学会の平和教育部会（PEC）での報告（絵を描かせる）など他の関連する実践について
過去の同様の実践の意義と限界性
パレスチナ人の孤立感の克服
「平和の回廊」（ヨルダンからの水路作り）
ホロコースト教育との関係
真実和解委員会
多文化社会の宗教理解教育

⑶ コメント

世界でも最も深刻な紛争を抱える地域の一つである、イスラエル・パレスチナ紛争地では、世界各地から多くの NGO が駆けつけ、困難を乗り越えながら平和を創り出すための多くの試みがなされている。平和教育についても様々な実践が行われているが、実際に双方の住民たちが生活する村を設け、最新のホリスティック教育の導入による平和のための教育がおこなわれているこの事例については、その推移が大いに注目されるものである。討論においては、日本の現状への応用について、意見交換がなされた。

報告Ⅵ.「多文化社会の宗教理解教育—英語教育における教材開発とフィールドワークの実践」大場智美（龍谷大学短期大学部）

⑴ 報告の要旨

多文化共生フィールドワークとして、「神戸宗教ツアー」を企画・実践した。英語教育における異文化理解が目的で、事前の慎重な打ち合わせにもとづき、参加者学生は様々な宗教への寛容な姿勢を学ぶ機会とした。神社、教会、モスク、ジェイン、仏教寺院、シナゴーグなどをめぐりつつ、神戸出身の学生たちは地元に対する再発見の感想を残している。また、神戸の宗教指導者たちは町内会会議などを通して仲良く暮らしていることを知り、ここから、平和的な多文化共生は不可能ではない、という実例に触れる体験をすることができた。事後のディスカッションなどフィードバックをさらに強化することが省みられた。

⑵ 検討項目

日本人の宗教観
ブラジル移民センターでの取り組み
アニミズム

⑶ コメント

古くより外国人との交流そのものが町をつくってきた歴史が神戸にはあり、そこでのフィールドワークは平和教育の立場からも依然として魅力的であり続けている。「宗教紛争」の原因の多くは、実は教義そのものの対立ではあまりなく、歴史の中で和解されていないトラウマ（とくに文民の殺戮など）が過去にあることが、平和学から指摘されている。教育の中で宗教への理解を進めると同時に、異なる宗教が共存・共生しているスポットから、その共生のための知恵を学ぶことも重要である。こういった教育により、歴史を知り和解を進めていく若い世代を育むことはとても大切である。

報告Ⅶ. “Japanese Human Security Interventions in Sri Lanka: Evaluating the Peace-building Outcomes”
Albie Sharpe（立命館大学）

(1) 報告の要旨（英語）

日本政府は、「人間の安全保障」の概念のもと、ODA としてスリランカへの支援をおこなっている。果たしてこの支援は効果的であるか、また現実に平和構築に資するものであるか、という点を追究する報告である。日本政府らが提唱している「人間の安全保障」の概念に対しては、定義の曖昧性（何でも入る）についての批判が従来から存在する。一方、実際に活動をおこなっている人々へのインタビューによれば、概念の理解が不徹底で、例えばインフラをつくることだと思われている場合もある。ニュー・サウス・ウェールズ大学が開発した「地域開発と健康ツール」には、文化的配慮、社会正義、グッド・ガヴァナンスなどの項目があり、またそういった評価方法自体に対する「メタ評価」の手法も開発されつつある。これが健康関連のプロジェクトの評価に適切であるかどうか、チームによる研究が進められている。平和教育の文脈からは、「健康」を視野に入れていくことや、「人間の安全保障」にエヴィデンス・ベースをつくり、日本のモデルが他に応用できるかどうかを考えていくこと、などが今後いっそう求められる。

(2) 検討項目

「人間の安全保障」の概念の現状（日本、カナダが中心だがあまり広範には認められていない）
数量的評価以外の評価方法（とくに「教育」を入れるか入れないか）
平和教育が含まれている場合にどう評価するか
「人間の安全保障」はなぜ日本とカナダのみが中心か
政府にとってよい支援でも個人にとってどうか
「ジャパン・プラットフォーム」について

(3) コメント

紛争地で必要とされる「平和教育」は、日本国内の学校教育で通常言われる「平和教育」と少し位相が異なり、例えばリアドン教授は”Pacification Education” と呼んで区別している。教育の実施自体が平和な社会の再生に必要であり、かつその内容は紛争当事者どうしの相互理解と和解をとりわけ含むものが期待されるためである。日本国内の「平和教育」が、その到達点として例えば紛争地への支援活動などの「アクション」を実施するときに、こういった客観的な基準にもとづく「評価」を入れていくという視点が、今後は一層必要とされるであろう。

報告Ⅷ. 「まちんと- Where is the little bird crying?」高木 洋子（グローバル・プロジェクト推進機構 JEARN）

(1) 報告の要旨

iEARN は、冷戦期に米ソの学校間をオンラインで結ぶことから始められた「国際協働学習」を推進する NGO で、現在は世界 130 ヶ国・地域から２万校・約 100 万人の子どもたち（90%は非・英語圏の生徒）が参加する、世界最大の国際教育のネットワークとなっている。JEARN は、日本で教師・学校・地域の学習グループを対象に国際協働学習の推進事業をおこっており、関西では神戸と高槻に事務所が置かれている。現在進行中の約 250 以上のプロジェクトのなかから、「まちんと」はヒロシマで泣いている少女を描いた松谷みよ子・作の絵本をヒントに、平和を主題とする創作絵本を世界各地の子どもが１人１冊描いて紹介しあう、という企画であり、アフガニスタン、台湾、東エルサレム、スロベニア、などで印象深い作品が創られている。ネットワークづくりや翻訳などのファシリテーターの役割が重要であり、子どもたちからの発信力をどう形にしていくかが現在の課題とのことである。

(2) 検討項目

活動自体への質問多数（翻訳の現状、ネットのセキュリティ、など）
IIPE での取り上げ方

(3) コメント

インターネットが普及し始めて以来、若い世代どうしの国際交流は様変わりし、様々な可能性が模索されてきたが、その大きな成功例のひとつである活動の紹介に、参加者一同、引き込まれるようであった。世界各地の子どもたちが、

思いおもいに筆を振るい、「平和」の絵本を創って、世界の子どもたち・大人たちに紹介していく。報告者のもとに届けられた、旅行用のスーツケースいっぱいに持参された作品を見るだけでも、この活動のさらなるひろがりと、大人たちへも大きなインパクトがあることを願わずにはいられなくなる。その他にもウエッブにも紹介されている、たくさんの絵本作品の実例を通じて、世界中の様々な平和観があることに改めて知らされると同時に、子どもたちの豊かな感性とそれぞれの絵本に込められた思いの深さと新鮮さに、「平和教育」のひとつの大切な原点を見る思いであった。

まとめ

関東では、2005 年に立ち上げられた「平和教育学研究会」があり、これまでにおよそ 50 回ちかくの例会が継続的に催されている。関西ではこのフォーラムの世話人のひとりである村上による「平和教育授業研究会（ペグ）」が毎年催されていたが、他にも平和教育に関する研究会の開催を望む声が従来からあった。

今回、平和教育地球キャンペーン（GCPEJ）の主催において、国際平和教育研究集会（IIPE）の準備のための学習会という形で、関西地域の平和教育の研究会が開催されたことは意義深く、また上のように多くの意欲的な報告が実施され、それぞれに討議が深められたことは、今後のプロトタイプとして重要である。

一方、従来の平和教育との連続性のあり方について、また 21 世紀の新たな平和教育の像をとらえるために必要な視座について、そもそも「平和教育学」なるものが客観的な評価の上に成立しうるかどうか、などについて、なお私たちの課題が残されていることにも目を向けなければならない。

今後、とくに関西地域でどのように平和教育の研究会を続けられうるのか、「平和教育関西国際フォーラム」がそのための契機となったと思われる。

2011 年 7 月 28 日
記録担当：野島　大輔

平和教育関西国際フォーラム
2011 年 5 月 14 日（土）～15 日（日）
於：京都教育大学 藤森キャンパス F 棟
出席者：のべ 22 名
平和教育地球キャンペーン（GCPEJ）・主催
国際平和教育研究集会（IIPE）・連携
世話人：淺川 和也、村上 登司文、野島 大輔

＊この記録は担当者によるものであり、慎重に聞き取り記載したつもりではあるが、
報告者や発言者の真意とは異なる可能性があることを、お断りしておきたい。